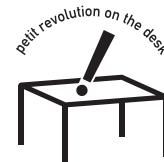


Vol.44

## 机の上の小さな変革



## 枠組みの壊し方

こんにちは、菅俊一です。今回は、私たちの生活の背後にある見えない前提条件について考えていきたいと思います。まずは、A4の紙とハサミを用意してください。オフィスだと難しいとは思いますが、できたら床に寝転がってA4の紙から正円の形をハサミで切り出してみてください。どうしても寝転べない場所でやる場合は、座った姿勢でもかまいませんが、天井を向いて手を上げた状態で切ってみてください。



結構難しかったかもしれませんが、いかがですか？実際にやっていただくとわかると思うのですが、上を向いたためにハサミのコントロールがなかなか覚束なくなってしまうこと以上に、切っている最中にどんどん切り離された紙の不要部分が自分の顔に落ちてきて視界が塞がっていくことのほうが、切り続ける際には大変だったのではないかと思います。

「顔に落ちてきた」という経験から、先ほどの行為を「不要な部分だけを切り離し自分に近づけている」と言い換えてみると、これまで私たちがやってきた、紙から何かを切り出すという行為は、不要な部分をだんだんと自分から遠ざけていたのだということになります。実際に寝転がって紙を切ることで、常に重力の影響が私たちにはたらいていたんだと実感するまでは、こういう捉え

方はできなかったわけです。あまりに当たり前すぎる前提条件は、つい普段から影響下にあることを忘れてしまいます。

### 強引な変化が前提を顕在化する

今回寝転がってやってもらったように、姿勢を強引に変えて実行することによって、私たちが何かをする際に無意識に前提としている条件が露わにされるため、普段自分がやっていた行為の意味を別の形で理解することができます。

たとえば、同じように寝転がった姿勢で紙にボールペンで何か書こうとすると、だんだんインクが出なくなり書けなくなってくることから、私たちが普段行なっている「ボールペンで書く」という行為は、重力によってインクが押されやすくなるように、ペンの向きを正しく保持し続けることなんだと捉え直すことができます。この捉え直しから、書きやすいペンとは、もしかしたら向きの保持をし続けやすいペンなのではないかという別の評価軸を設定できるかもしれません。そうすると、ペンをデザインするときの優先事項が、これまでと違うものになってきます。

日常の行為の姿勢を強引に変えてみることは、周りから見たら奇妙な行動に見えますが、前提を疑って別解を引き出すためには、必要なことなのかもしれません。▲

#### PROFILE 菅 俊一 〈SYUNICHI SUGE〉

コグニティブ・デザイナー。表現研究者。映像作家。多摩美術大学美術学部統合デザイン学科准教授。1980年東京都生まれ。人間の知覚能力に基づく新しい表現を研究・開発し、様々なメディアを用いて社会に提案している。主な仕事・著書に、NHK Eテレ『2355/0655』、『観察の練習』『ヘンテコノミクス』など。